

国際協力特別賞

新渡戸の願い—平和への架け橋

金沢大学附属高等学校 2年

渡邊 英瑠

“International Pacifist” ある碑に刻まれた文字が私の目に飛び込んできた。その碑はカナダのヴィクトリア市にあるロイヤル・ジュビリー病院の和風庭園の一角に建っていた。これは新渡戸稲造を祀ったものだった。昨夏私は両親と共にカナダ・アメリカを訪れた。父は20年前にカリフォルニア州の大学に留学していたので、その時お世話になった恩師と再会する為だった。今はヴィクトリアに住んでいる恩師の先生を訪ねて、奇遇にもこの碑に出会ったのである。私はこの碑に刻まれた言葉が忘れられず、帰国後、新渡戸稲造に関する本を読んだ。彼は晩年、国際連盟事務次長として孤立する日本に心を痛め奔走したが、バンフでの会議の後、病に倒れあの病院で亡くなったことを初めて知った。そして皮肉にもこの年に日本は国際連盟を脱退したのである。

じっと目を閉じると彼の大きな使命感に胸を打たれた。彼は米国に留学した時から自分のmissionは太平洋の架け橋になることだと思っていたのではないだろうか。そして1899年、外国人に日本のことを理解させたいという願いから、英語で『武士道』を出版し、これは世界的なベストセラーとなった。

カナダを後にして父の留学先に近いサンフランシスコに行った。1951年、ここでサンフランシスコ平和条約が調印されて、戦争が終結し日本にもやっと平和が訪れた。調印した場所は、現在 War Memorial Opera House として残っていた。吉田茂がここで調印したのかと思うと不思議な気がした。戦後71年が経過して、余りにも平和のため戦争の記憶は薄れてしまっているが、現実には我が国と中国、韓国との間には尖閣諸島や竹島の領有権などをめぐって緊張関係が続いている。

昨秋私は中国瀋陽出身のCさんと力を合わせて、模擬国連全国大会への切符を手にした。選考の課題は「異文化理解」だった。私達は文化交流は次世代を担う若者の交流に一番重点を置くべきであり、ただし、その際には自文化を正しく理解し、誇りを持つことが肝要である。そうすれば、自然と他の文化に対しても敬意を払って交流することができるのではないだろうかと言った。その事を強く確信したのは、まず私達の出会いがあったからである。彼女は2歳の時に来日したので、日本を母国のように感じていた。中学3年生の時に故郷の9.18歴史博物館を訪れた彼女は祖国中国の歴史を何も知らないことに気付き、初めて自分が中国人であることを意識した。私は、彼女が日本と中国の狭間で揺らいでいる

のを感じた。自分自身も自国の歴史について多くを知らないことに気付いた。そこで私達は加藤陽子著『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』を資料として日本の近現代史と一緒に学ぶことにした。私達は、まず各々の祖国について考え話し合った。私達の祖国は、様々な問題を抱えているが、友達同士の語り合いで、相手の国の文化や歴史について尊重することができるようになったと感じた。背負うものがない若者だからこそ、気兼ねなく率直に語り合えた。模擬国連の基調講演では田瀬和夫さんが今国連で取り組んでいる「人間の安全保障」について熱く語って下さった。この取り組みは人間の生存、生活、尊厳を脅かす脅威を包括的に捉え、開発と安全を一体化する、つまり経済的社会的なアプローチと法的政治的なアプローチを連携して進めていくことなのだと分かった。そして何よりも、人間を中心に考えた概念であるということが伝わってきた。私はこの「人間の安全保障」という言葉に人類にとっての平和と希望を感じた。

北米の旅を通して、平和の架け橋が今日に至るまで築きあげられてきたのかとその歴史に重さを感じた。今度は私達が 21 世紀の平和の架け橋を架ける番である。Cさんと私が築いたのは本当に小さな架け橋だが、そんな小さな架け橋一つ一つが繋がっていくことこそが、世界平和への第一歩となるのではないだろうか。